書評

岡野 英之 著

『西アフリカ・エボラ危機 2013-2016 ――最貧国シエラレオネの経験』

（ナカニシヤ出版、2022年）

評者 **中川 千草**

本書は、2013年から2016年にかけて西アフリカで発生したエボラ危機について、国際社会からローカルなレベルまで、さまざまな感染症対策の経験を文化人類学的な視点からまとめたもので、2022年度地域研究コンソーシアム賞（登竜賞）受賞作である。当時、現場において多くの組織が関わり、それが混乱を来したり、功を奏したりする様が丹念に描かれている。著者は、本書の舞台となるシエラレオネにおいて10年近く、武力紛争や平和構築を専門的に研究してきた。その最中、エボラ出血熱（以下、エボラ）が現地を襲ったことが本書を執筆するきっかけとなった。

本書のねらいは、西アフリカで前代未聞の規模でエボラが広がり、それに対して「〈人類〉がいかに対処したのか」（p.Ⅷ）について、あきらかにすることである。対策現場に関わる人びとは国際社会からローカルなレベルまで存在し、かつ対策に用いられた知識や制度についても、世界標準のものから在来のものまでが含まれていた。医療的人道支援の現場では、国際的な保健衛生の規範が先行するが、実際に感染のリスクにさらされているのは現地の人びとである。当然のことながら、現地で培われてきた経験や知識を無視することはできない。著者は冒頭で「〈人類〉はいかに対処したのか」という表現を用いることによって、どれほど多様な人びとが、どれほど多様な価値観と制度が混雑するなかで、リスクに直面し対策を講じねばならなかったかを強調している。

エボラのホットスポットとなったギニア、シエラレオネ、リベリアは、日本ではあまり知られていない国々だ。しかも、そこで発生したエボラという日本で未経験の感染症の大規模流行を本書は扱うため、読者はまず、危機以前のシエラレオネにおける一般的な日常生活の様子や社会状況を把握しておく必要がある。その上で、エボラ危機というテーマと向き合うためには、国際社会による従来の支援の実情、現地の医療サービスをめぐる課題、エボラそのものについての基本情報や危機の全体像などを「正しく」理解しておかなければならない。ここで本書の構成を述べる。

第一章　流行のはじまり
第二章　最貧国と国際社会の感染症対策
第三章　西アフリカ・エボラ危機の全体像
第四章　シエラレオネの社会事情と医療事情
第五章　シエラレオネでの感染拡大
第六章　コネとカネで確立させたエボラ対策
第七章　終章

第一章では、エボラそのものの解説と、この大規模流行がどのように始まったのかについて触れ、第二章では、脆弱な政府ゆえの社会的混乱の生じやすさや教育の不十分さが常態化している「最貧国」の医療事情が綴られている。安全な水の確保がいかに難しいか、基本的な医療サービスさえあれば助かる命がどれほど消えていっているか。これらを示し、西アフリカのエボラ危機を読み解く準備を読者に促す。

さて、脆弱な医療環境を緩和するために活動するのが、国際援助機関である。国際保健分野でのリーダーシップを担うWHO(国際保健機関)、他国の政府による二国間援助などはよく知られたもので、その拠出額は非常に大きい。次いで、いわゆる無数の国際NGOが存在する。このように多くの機関・団体がそれぞれの業務を実施しているが、著者は、こうした状況があらたな問題、「分断化(fragmentation)」(p.37)を生み出すと指摘する。つまり、各制度、予算、思想がプロジェクトを動かすため、全国一律の一貫した政策を施行しづらくなっているという。しかし、山積する社会問題を「最貧国」が自力で解決することは望めず、結局のところ国際的なカバーに頼らざるを得ない。こうしたジレンマは、経済的に発展途上の国・地域ではめずらしくなく、エボラ危機でも同様となる。

第三章では、西アフリカ・エボラ危機の全体像が論じられている。当初エボラが嘘だと認識されてしまったことや広がった噂を振り返り、対策にあたり、住民からの信頼獲得がキーとなったことを指摘する。また、急ピッチでの病院建設や未承認薬の使用、さらに国際社会が「安全保障化の色合いを強めていく」いきさつが描かれている(p.85)。著者は、国連が公衆衛生に関して初めてミッション(国連エボラ緊急対応ミッション/UNMEER)を設置した経緯と、ホットスポット三国以外での感染発生や外国人の罹患に触れつつ、経済大国からの支援が引き出された後も日に日に深刻さが増し、繰り返される終息宣言によって、現地が疲弊していった様を示す。

第四章では、シエラレオネ社会を理解するために、国が生まれた経緯とその後の歴史、現地の医療事情が順序立てて論じられる。医療サービスが不十分で医師不足が問題視される現地では、「地域医療官(community health officer)」(p.122)と呼ばれる、「医師と看護師のあいだ」に位置する人びとが、診察、投薬、さらに簡単な手術を担っているという。かれらはエボラ危機においても活躍することになるが、危機前から慢性的な予算不足がつづき、その結果、汚職の事例が後を絶たなかったという。しかし著者はそれを「許容せざるを得ない」(p.126)とし、こうした逸脱に意義を見出し、「制度という建前だけでは現場は回らない」と指摘する(p.127)。次いで、シエラレオネ社会とそこで発生したエボラ危機を理解するために欠かせない三つのキーワード、首長区(チーフダム)、パトロン=クライアント関係、市民社会団体(civil society organization)が解説される。人道的支援活動では、当該社会を「正しく」理解するための情報と経験が必須だが、その把握自体が難しい(中川2015)。本書の後半では、こうしたキーワードが、社会の強みとして支援活動に生かされる点が描写される。

第五章でいよいよ、シエラレオネのエボラ危機の詳細に入る。前章まで詳述されてきた危機のバックグラウンドという伏線が、これ以降で回収されていく。時系列に沿った流行プロセスに関する記述からは、危機前から既に継ぎはぎだらけだった医療システムがいよ

いよ崩壊し、対策を牽引した医師の死が社会全体に絶望感をもたらした光景がありありと伝わる。

では、どのようにして壊滅的な状況を抜け出せたのか。

第六章で著者は、国際社会からのカネとモノを分配するシステム構築の過程に着目する。一つ目の特徴は、イギリスが既存の指揮系統にテコ入れし、シエラレオネ軍をそのトップに選んだ点にある。軍のトップダウンの命令系統と迅速な遂行能力は確かに、支援の現場では勝手が良い。また、二つ目の特徴として、人の動きの制限、対策チームの結成、啓発活動に一般の人びとを動員するに当たって、最高首長を頂点とした首長区という自治体制が機能した点があげられている。こうした独自の条例やローカルな取り組みは、「制度だけでは回らない現場」を補完し、効果的なカネとモノの分配を可能にした。

本書で目を引くのは、英語と日本語を合わせて350点以上もの膨大な参考文献数である。このボリュームの資料を収集し分析するパワーに圧倒される。一方で、ここまでしなければ執筆すること（読者に理解してもらうこと）ができないという現実を思い知らされる。このような丹念な資料分析を真似することは簡単ではない。わたしは著者と同じように西アフリカのエボラ危機に注目し研究活動をおこないつつも、その総括ができなった。流行当時こそ、現地に暮らす人びとの無事を案じつつも、その地を踏むことができないもどかしさと苛立ちを、執筆や研究費の獲得にぶつけた。しかし、流行が収まると、現地の人びとと同じように「もう終わったこと」とし、日常に戻ってしまった。

本書は読者が「西アフリカのエボラ危機」を理解するために必要な情報を一つ一つ示し、それらを積み重ね、シエラレオネという一国の事情とそこで起こったできごとを、主に対策のシステム構築という観点から紐解くことを試みている。流行時には、多くの誤解や偏見が生じた。それらに対する警鐘として、本書では背景説明に多くのページが当てられ割かれたと考えられる。

この点を酌んだ上で、危機前後の人びとの機微をより知りたいと本書に求めるのは贅沢だろうか。流行時のシエラレオネにおける人びとの反応は時折細かく書かれ、それらは全体像を理解するためのパーツとしては十分に機能している。たとえば、ローカルな埋葬方法の「正当性」や「死期を察すると故郷に帰る」という習慣についての記述は、知的好奇心を満たしてくれると同時に、こうした生活の詳細とエボラ危機との関係性についてさらに関心をかき立てる。WHOは、最高首長や宗教関係者を巻き込み、活動の妨げとなっていた信頼関係の欠如という課題を攻略したというが、具体的にどのように巻き込んだのか。口頭での説得だけで、かれらは動いたのか。その「口説き文句」を知りたい。そもそも、現地の人びとはエボラ危機を通して、一体何と戦い、何を克服し、何をあきらめたのか（Maltais et al. 2022）。正規の制度だけでは埋められない部分をローカルな取り組みが担うというシエラレオネ的レジリエンスには、ワクチンやあたらしい治療法でさえもカバーできないような、心の面も含んだ生活の再生（牧野 2021）プロセスも当然含まれているだろう。また、わたしたちが、感染症とともに生きることを避けて通れないのであれば、社会と環境との相互作用という観点からの分析が求められるのは、いわずもがなである（中川 2023）。Covid-19のパンデミックとその恐怖の飼い慣らしをわたしたちが経験したいまだからこ

そ、こうした点に特化した次作を著者には期待せずにはいられない。

参考文献・引用文献

中川千草（2015）「ギニアにおけるエボラ出血熱の流行をめぐる「知」の流通と滞留」『アフリカレポート』53、57-61 頁

中川千草（2023）「感染症・パンデミック」環境社会学会 編『環境社会学事典』丸善出版、556-558 頁

牧野厚史（2021）「新型コロナウイルス感染症と環境社会学」『環境社会学』27、1-2 頁

Maltais, Stéphanie, Brière, Sophie, and Yaya Sanni（2022）Comment la résilience post-Ebola en Guinée contribute à la gestion de la COVID-19?, *Santé Publique* (34):57-567

■評者紹介

①**氏名（ふりがな）**：中川千草（なかがわ・ちぐさ）

②**所属・役職**：龍谷大学農学部准教授

③**出身地**：三重県

④**専門分野／地域**：社会学、地域研究／ギニア、日本

⑤**学歴**：関西学院大学大学院社会学研究科博士課程（社会学博士）

⑥**職歴**：総合地球環境学研究所プロジェクト研究員を経て、2015年４月より現職

⑦**現地滞在経験**：2008年よりフィールドワークをスタート、妊娠出産およびエボラ出血熱・covid-19の流行期間以外は、ほぼ毎年渡航

⑧**研究手法**：参与観察、関係者への半構造的インタビュー調査

⑨**研究上の画期**：外国語学部での学び、フランス留学、感染症の大規模流行による渡航制限

⑩**推薦図書**：Veronica Gomez-Temesio, Frédéric Le Marcis, 2019, La mise en camp de la Guinée Ébola et l'expérience postcoloniale, *L'HOMME* 222: 57-90, éditions EHESS (https://doi.org/10.4000/lhomme.30147)